

有けり、針は蛇の左右の眼に立たりけり、○中名をえたる人々のふるまひかくのごとし、ゆゑ、しかりける事也。

〔皇國名醫傳前編中〕惟宗氏○中

惟宗氏、本姓秦、始皇十二世孫、功滿王之後也、有公直者、賜姓惟宗朝臣、子孫因以爲族、數世曰俊雅。從丹波忠明學醫、爲近江掾、子俊通有才學、深造醫理、擢侍醫醫博士、博士之職、和丹二氏遞掌之、他人弗獲與焉、而俊通特任之、蓋異數云、

〔古今著聞集七〕術道宇佐大宮司なにがしとかや、癩病をうけたる由聞へ有て、一門の者共、改補せらるべきよし訴へ申ければ、大宮司はせのぼりて、醫師にみせられて、實否をさだめらるべきよし奏し侍ければ、和氣丹波のむねとあるともがらに御尋有けり、中原貞説も、おなじく召に應じて、御尋に預りけり、各びやく白らいといふ病のよしを奏しけり、療治すべきよし、の勘文奉るべきよし仰下されければ、めんくりに罷出で、しるして參らすべき由申けるに、貞説申けるは、非重代の身にて、一卷の文書のたくはへなし、知りて侍る程の事は、當座にて考申べしとて、則しるし申けり、もろもろの醫書共、皆悉く引のせて、ゆゑ、しく注申たりければ、叡感有て、申うくるに隨て、和氣の姓を給はせける、後には諸陵正に成て、子孫いまにたへず、

〔吾妻鏡十六〕建久七年○正治元年三月十二日甲辰、姫君追日憔悴御、依之爲奉加療治、被召針博士丹波時長之處、頻固辭、敢不應、仰件時長、當世有名醫譽之間、重有沙汰、今日被差上專使、猶以令申障者、可奏達子細於仙洞之旨、被仰在京御家人等云云、

〔三長記〕建仁元年七月十八日丙寅、今日典藥頭頼道朝臣死去、當世之扁鵲也、於業病者法藥猶無驗、況乎醫病歟、惜々々、

〔下學集上人〕扁鵲周末戰國時名醫也、史記云、扁鵲、姓名、越人、桑君、以禁方傳之云々、